

大きな問題点

従来、国語教育は、“話す・聞く・読む・書く”という四領域に分けて指導して来た。四つに分けること自体は悪いことではないが、これによって指導が分散した。この四つには本来軽重があり、本が立たなければ教育効果は得られないのである。

勿論“読み”(わけても漢字の読み)が本であり、その力がそのまま“聞く”力になり、“話す”力を育て、すでに述べたように“書く”力をも養うのである。戦前の教科書が“読本”と呼ばれ、その学習が“読み方”と呼ばれたが、それが現実的な国語教育だったのである。

現実を言えば、我々が毎日“読む”漢字の数及び種類は大変なものである。それに比べたら“書く”漢字の数及び種類は、書くことを仕事にしている人でない限り極めて少ない。書くことを仕事にしている人でも、書く内容はほぼ限られていて、書く漢字の範囲は決して多くはない。読む漢字の範囲は無限であるが、書く漢字の範囲は狭い。

これほど実用面で格差のある“読み”と“書き”を同列視する(事實は“書き”に重点を置いている)今の教育は、とても正しい教育とは言えないであろう。

まして、すでに述べたように、「読み(理解)が不十分のうちから書き(表現)の学習をしても力はつかない」のである。国語学習はもっとも“読み”に徹することである。極端に言えば、“読み”を十分にすれば、“書き”をまったくしなくてもよい。書く必要が生ずれば、“読み”によって養われた書きの潜在力が、すぐに書く力を養ってくれる。

字体と筆順について一言したい。字体については、内閣訓令があり、筆写の場合に“とめ、はね、曲直・方向”についてやかましく言わないよう示されている。筆順については、文部省の手引き書があり、その前書きに「本書に示されている筆順はただ一例に過ぎない。従ってこれだけが正しい筆順というのではなく、他の筆順を否定するものではない」と断わっている。これが少しも守られていない。

“木・女”を×にし、上を“丄”と書くと×にする。このように苛酷な指導は、子供の学習の楽しみを奪い、やる気を失わせるものである。

かなの場合は、かなり形がくずれていてもそれらしく見えれば×にはしない。だから、そのうちにりっぱな字を書くようになる。漢字だって同じこと。初めから正しく美しく書ける訳がない。大目に見て、それらしく見えたら にしてやることだ。良い点がもらえれば学習意欲も高まり、すぐに正しく美しく書けるようになる。